

『草堂題東壁』 白楽天

廬山の風光をこよなく愛した中唐の詩人

白楽天(七七二〜八四六)は、日本の文学に及ぼした影響という点からいえば李白・杜甫をも凌いでいるといえよう。中唐の詩人。名は居易、字は楽天、晩年に香山居士、醉吟先生と称す。七十五歳の天寿を全うし三八〇〇余首の詩を残している。

生まれたのは、唐の代宗の大暦七年正月二十日、鄭州新鄭県(今の河南省)であって父白季庚は四十四歳、母陳氏は十八歳だった。すでに兄幼文ようぶんがおり、このあと同じく文学で名を知られている行簡こうかんが生まれた。父の官は低くかつ転宅が多かったので、祖父白鏗はっこうの家で生まれた。白鏗も県令を最後とする中級官吏ではあったが五言詩が巧で十卷の

文集があったというから、詩人的才能はこの祖父と外祖父陳潤ちんじゆんの二人から受けている。陳潤は全唐詩に八首を残している。この様に詩人としての血統はあきらかで、五歳から詩を作ること学んでいる。詩は今に残っているのは先に記した様に三八〇〇余首でその数においては唐の詩人の第一位である。

白楽天の詩友

白楽天の詩友で深交のあった人物が二人いた。一人は元稹じん（七七九〜八三一）今一人は劉禹錫りゆううしやく（七七二〜八四二）であった。元稹とは互いに詩を贈答しあい、当時詩を賦す者、元白と称され元和体げんなたいと名づけられた。

元稹は白楽天より十五年前に没した。元稹の死後白楽天は劉禹錫と互いに詩を贈答しあい詩は劉白と称された。

白楽天の詩集は最初に編纂されたのは「白氏長慶集」で、元稹の俳纂による。次に廬山東林寺経蔵院や蘇州南禅寺経蔵内等に在る「白氏文集」である。

白楽天の略歴

西暦七七二年唐の代宗みよの御代大暦七年正月二十日鄭州新鄭県に生まれた。五歳の時詩を作ること学び、十六歳の時初めて長安に上り、文を袖にして著作郎、顧況こきやうに謁し認められた。貞元十六年二十九歳の時、中書舍人（宮中の文

書、詔勅をつかさどる）高郢こうていの下に及第し、有能な官僚として順調に出世するも元和十年四十四歳の時皇帝の差し出口をとがめられ中央より追われ江州司馬に任ぜられた。その職司馬を司どるも仕事らしい仕事もなく事実上の左遷であった。そうこうするうち忠州、杭州の刺史を経て長慶四年五十三歳の時都で役人をしていた冬、「白氏長慶集」が編纂された。

五十四歳から七十一歳まで蘇州の刺史や各地の刑部侍郎（刑罰および刑事行政をつかさどる）や、太子少伝（皇太子の教育係）を歴任した。七十四歳洛中で住いの詩、「白氏文集」が完成さる。

会昌六年（八四六）、八月七十五歳で没した。十一月龍門に葬られた。静かな小高い山で黄河を見下ろし対岸には石窟にたくさんのお仏像のある風光良き処に、今も白楽天は眠っている。日本から中国を訪れた吟界の参拝者が今も後を絶たない。

白楽天の詩の影響

当時白楽天の詩は非常に高く評価され、伝誦された。そして中国のみならず、日本、新羅しんらにも伝わった。我国に「白氏文集」が伝来すると「文選」「梁の蕭統（昭明太子）の編、周から梁に至る間の優れた文章、詩賦を種類別に集めたもの」と共に「長恨歌」「琵琶行」は宮廷・文人の必読書と

して愛用され、我国の文学に大きな影響を及ぼした。嵯峨天皇の御代は唐の元和・長慶の時代で交流があり、楽天が三十六歳、五十三歳の時で、白詩が嵯峨天皇の御府に一部のみ伝わりその詩を勉強されたという。

菅原道真が太宰府で不出門の詩の中で、「都府樓繞看瓦色。観音寺只聴鐘聲」と賦したが白詩の「遺愛寺鐘欹枕聲。香爐峰雪撥簾看」を参考にされたのである。

清少納言の枕草子に「雪のいと高う降りたるを例ならず御格子参りて炭櫃すみびつに火おこして物語などして集まり侍まじわらに「少納言よ、香爐峰の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ、人人もさる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ云云」と書いている。同じく此の句を熟読していたからに他ならない。

又藤原公任の「和漢朗詠集」の撰には白詩の詩句を一三八條引いている。この様に白詩は我国の文壇に燦然と光を投げかけたのである。

草堂題東壁 白楽天

日高睡足猶慵起 日高く睡り足りて猶起くるに慵し
小閣重衾不怕寒 小閣衾きんを重ねて寒を怕おそれず
遺愛寺鐘欹枕聴 遺愛寺の鐘は枕を欹かたてて聴き
香爐峰雪撥簾看 香爐峰の雪は簾かを撥かけて看る

匡廬便是逃名地 匡廬きやうろは便ち是名を逃るるの地
司馬仍爲送老官 司馬は仍老を送るの官と爲す
心泰身寧是歸處 心泰ゆたかに身寧やすきは是歸する處
故鄉何獨在長安 故郷何ぞ獨り長安にのみ在らんや

この詩は「香爐峰下新ト山居草堂初成偶題東壁」(香爐峰下かうろうに新あらたに山居さんきよをトし草堂初めて成り偶なま東壁に題す)という詩題で元和十年(八一五)に江州(江西省九江市)に左遷されて三年目の楽天四十六歳の時の作。彼は廬山の風光をこよなく愛し、日々悠々閑適の生活をする中、二年後名勝廬山の北部にある香爐峰下に草堂を建てた。落成した時、東壁にこの詩を記した。

三室ではあるが自然の石を階段にして桂の木を柱にし、竹で編んだ垣で草堂を囲み、冬は南の軒端が暖かく、夏は北の戸口から涼しい風が通り、飛泉が迸る砌、竹の葉が窓を払う風情のある草堂だと賦している。

ここに取り上げた詩はその後、「重題四首」として草堂の壁に題した内の三首目の詩である。

この時楽天は江州司馬であった。司馬は州の軍事、警察をつかさどる官で、平生は閑が多い。新しく建てた草堂で日々、身も心もゆったりと過ごしていた。



廬山の草堂



ので老いてきた自分には悠々とくらすのに丁度良いと思う。心身が安泰なのは最後の落ちついた一番の場所であって長安だけが故郷とは限っていないのである。と詠んでいる。



朝はゆっくり布団の中に居、遺愛寺の鐘が聴こえて来たら枕を手で今までの位置ではなく動かし、その音がよく聴こえる様にして耳を傾け、香爐峰に積もっている雪は簾を巻き上げてその清らかな様を眺め楽しむのである。

ここ廬山の麓は田舎で、都とは違いすばらしい風光と落ち着いた四囲と人々で、名譽等世間体を一向にかまわない所で、司馬の官は閑散である

鑑賞

何とおおらかな人生観。この時楽天は元和九年朝廷で太子左賀善太夫だったが、元和十年江州司馬に貶されていたにもかかわらず、江州の住まいした廬山の辺り、風光をこよなく愛し、悠々閑適の日を送った。現代の私たちも、目まぐるしく環境や生活様式が変動する中であって、この楽天のプラス志向で人生を謳歌した生き方を、手本にすべきであると痛感する。

この詩は七言律詩で起聯は楽天の生活の様子が窺える。のんびりと（何時に起床、何時に役所出仕事）無理をせず悠々と暮らした。

領聯は廬山の（身のまわりの）風情を心から楽しんだ。それは楽天に詩情があり心に豊かさがあるから。

頸聯は二十九歳から役人として年月を過ごして来た今四十六歳の役人としての人生観が表わされている。（当時の平均寿命からして晩年。実際は七十五歳没）楽天は人を押しつけて立身出世しようとはしなかった。

結聯は此処廬山は心泰く身も寧く、悠悠閑適に暮らしているの、長安に何も未練はない、此処が第二の故郷だと楽天の幸せな気持ちを詠んで結んでいる。

楽天の姿や様子が手に取るように伝わってくる名詩である。

香山居士と号した楽天。香爐峰の麓を第二の故郷とした

気持ち
が詩を
とおし
て、ひ
しひし
と胸に
伝わっ
てくる
のであ
る。